

平成24年度宮古群島病害虫発生予報第3号(6月予報)

I 6月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	40	40	30
平年並	30	30	30
低い(少ない)	30	30	40

(平成24年5月25日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
宮古群島(宮古島)	27.2	29.9	25.2	185.5	191.9

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 6月の発生予報および防除上の注意事項

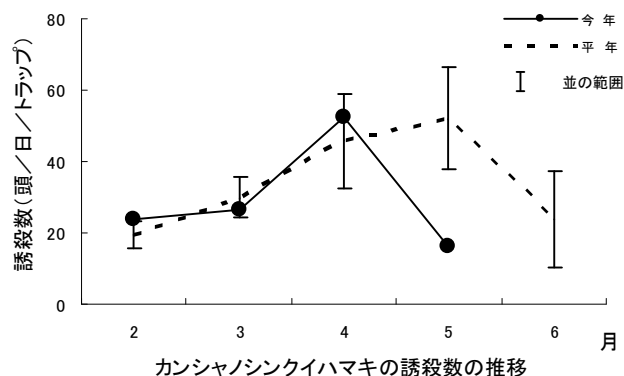
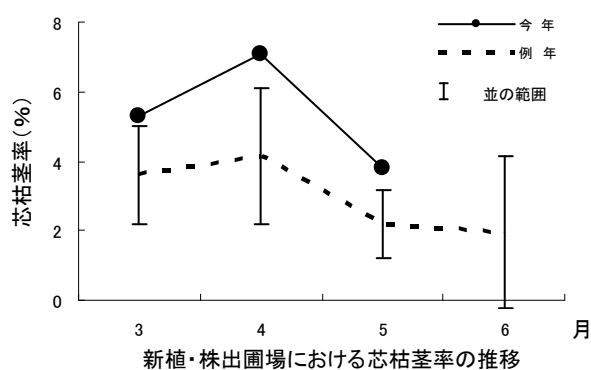
1 さとうきび

(1) カンシャシクイハマキ

発生程度 : 並

予報の根拠

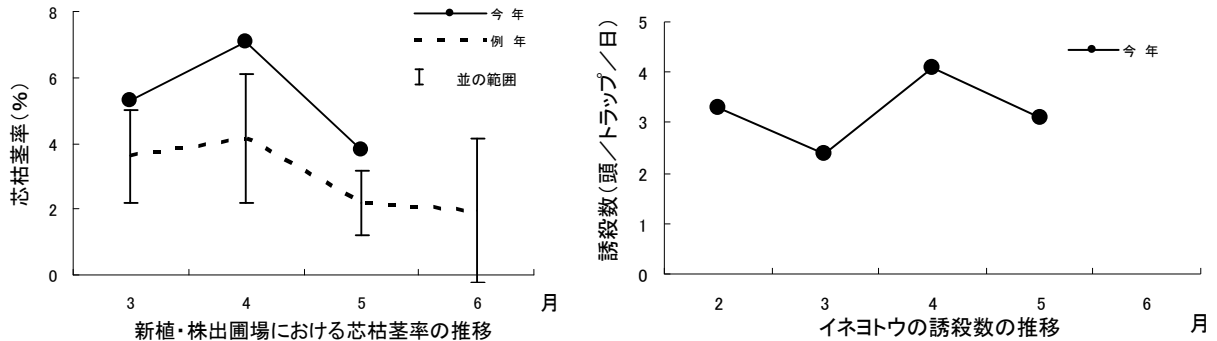
- a 5月中旬の調査の結果、春植・株出圃場における芯枯茎率は3.8%(前年1.2%、例年2.2%)と例年より高かった。
- b 5月のカンシャシクイハマキ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は15.9頭(前年50.4頭、平年52.1頭)と平年より少なかった。



<防除上注意すべき事項>

- a ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- c 圃場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- d 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- e 平成24年度病害虫発生予察技術情報第1号参照(平成24年4月5日付)。

- イネヨトウの防除対策
 - a 5月中旬の調査の結果、春植・株出圃場における芯枯茎率は3.8%(前年1.2%、例年2.2%)と例年より高かった。
 - b 5月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は3.1頭であった。
 - c 与那国島において、イネヨトウの被害が多発した際の誘殺虫数は2頭以上であった。



<防除上注意すべき事項>

カンシャシクイハマキの防除上注意すべき事項を参照。

- サキシマカンシャクシコメツキの防除対策
 - a 5月の合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たりの誘殺数は0.3頭(前年0.2頭、平年0.3頭)と平年並であった。
 - b 更新圃場は速やかに古株などの残渣を処理し、植え付けまでに数回耕耘して幼虫密度の低減を図る。
 - c 培土時に他の土壌害虫の防除も兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
 - d 翌年の株出し不萌芽を防ぐために、卵が孵化した頃(5~6月)に株元に薬剤をかん注する。
- アオドウガネの防除対策
 - a 5月の予察灯への日当たり誘殺成虫数は4.4頭(前年0.2頭、平年5.0頭)と平年並であった。
 - b 5~7月に成虫が発生し特に6月は成虫の発生ピークであることから、誘殺灯の保全・管理を徹底する。
 - c 6~7月は幼虫の防除適期(1~2齢期)にあたるので、例年被害の多い地域では防除適期を逸しないように薬剤を施用する。

2 マンゴー

- 炭疽病の防除対策
 - a 5月中旬の調査の結果、一部園地で発生がみられた。
 - b 罹病した葉や枝、摘果した果実等は施設外へ持ち出し処分する。
 - c 収穫果実への被害軽減のため、袋がけ前までの防除を徹底する。
 - d 果実肥大~成熟期は、治療剤を選定し、定期防除に努める。
- チャノキイロアザミウマの防除対策
 - a 5月中旬の調査の結果、葉当たり虫数は1.2頭(前年0頭、平年0.5頭)と平年よりやや多かった。
 - b 不要な新梢は本種の発生を助長するので、早い時期に摘除する。
 - c 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
- ハダニ類の防除対策
 - a 5月中旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.1頭未満(前年0.3頭、平年0.5頭)と平年よりやや少なかった。
 - b 袋がけを行う前の防除を徹底する。